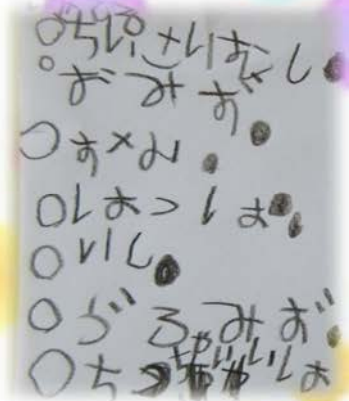


2021年度 ソニー幼児教育支援プログラム

自然とともに おおきくなーれ

～子どもの心の動きからの広がり、成長へ～



学校法人 中沢学園 みなみ若葉こども園

目 次

1. はじめに ～みなみ若葉こども園が考える『科学する心』について～・・・P 1
2. 実践報告 3歳クラス
 - 事例1 「どんな虫がいるんだろう？」・・・P 2
 - 事例2 「クワガタと遊びたいなあ」・・・P 3
3. 実践報告 4歳クラス
 - 事例1 「“ドキドキ” “ワクワク” カエルとの出会い…」・・・P 5
 - 事例2 「オタマジャクシ捕まえられるかな？」・・・P 6
 - 事例3 「オタマジャクシは何を食べるの？」・・・P 7
 - 事例4 「オタマジャクシなの？カエルなの？」・・・P 8
 - 事例5 「雨の日探検隊に出発！」・・・P 9
 - 事例6 「カエルに良い環境は？」・・・P 9
 - 事例7 「カエルは何色になるの？」・・・P 11
 - 事例8 「カエル先生に聞いてみよう！」・・・P 13
4. 実践報告 5歳クラス
 - 事例1 「不思議なペットボトル！」・・・P 15
 - 事例2 「カブトムシと一緒に」・・・P 16
 - 事例3 「カブトムシってうんちするの？」・・・P 17
5. 実践の考察・まとめ・・・P 19
6. 課題と今後の方向性・計画・・・P 20



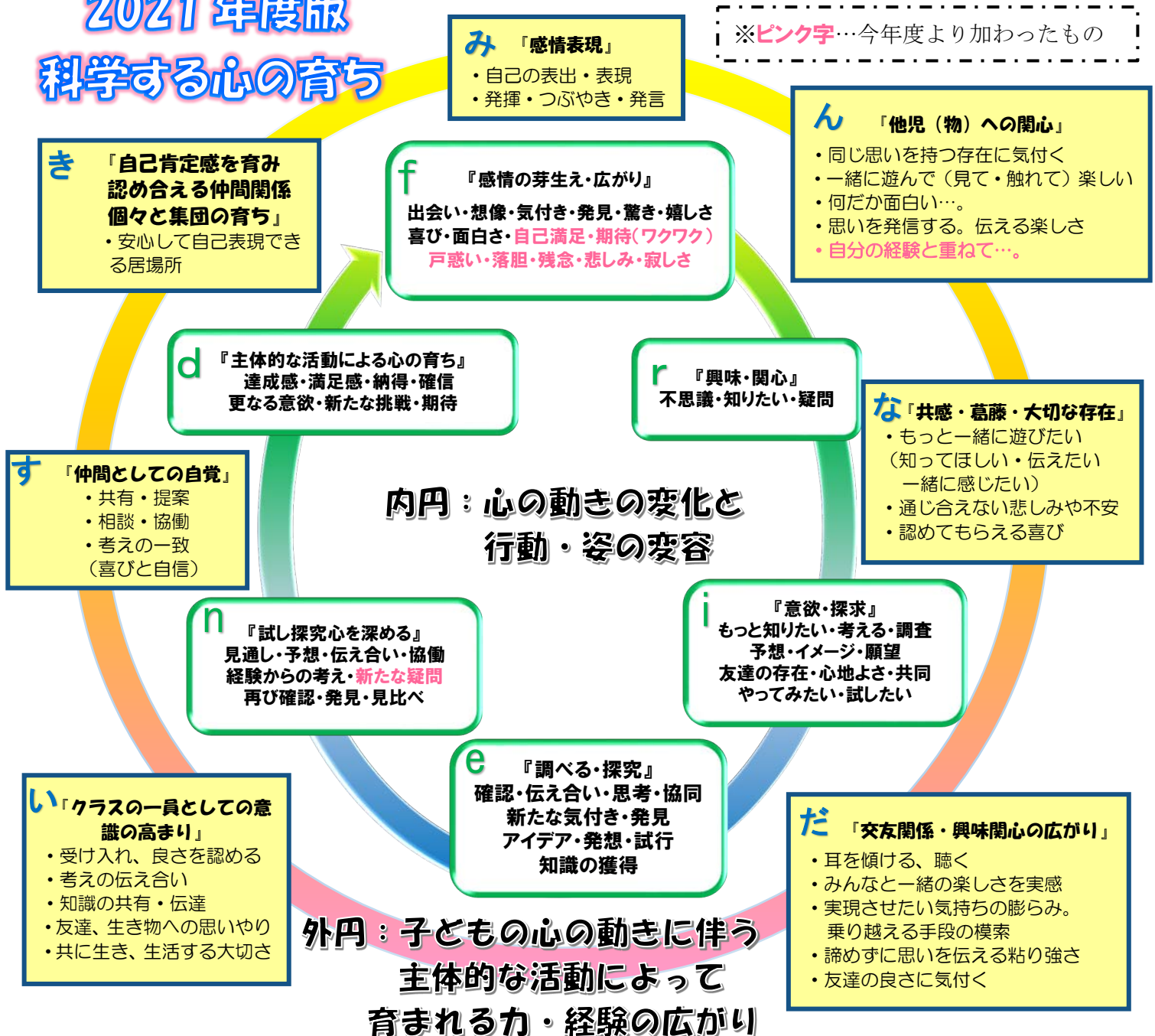
1. みなみ若葉こども園が考える「科学する心について」

「科学する心」とは、日常生活の中で子ども達が興味関心を抱いたことに自ら関わろうとし、「なぜ?」「どうして?」と不思議さ・疑問を感じたり、「～かもしれない!」「やってみたい!」と予想・試そうとしたり、実践して様々な思い等の心の動きだと考える。その心の動きを友達や保育者に伝え、思いを共有することで更に興味や視野が広がり、行動に繋がっていく。意欲が高まり、新しく生まれる発見や疑問を友達と一緒に考え、共同して遊びを深めていく姿が「科学する心」の原点となり、心の動きが豊かに行き来しながら繰り返し経験し感じたことを表現することで「科学する心」が育つと考える。

昨年度、『心の動きの変化と行動・姿の変容』と『主体的な活動によって育まれる力、経験の広がり』の視点と照らし合わせて考え、新たに【科学する心の育ち】の図表を作成した。昨年は4歳児に焦点を当て研究したが、今年度は3歳～5歳児の実践事例をあげ、心の動きを読み取り、2つの視点から分析し、科学する心の成長過程を捉えながら、年齢ごとに子ども達の成長の変化や必要な保育者の援助・環境構成のポイントなどを考察していった。

更に園として科学する心について踏み込んで考え、理解を共有し、同僚性を深めたいと考えた。

2021年度版 科学する心の育ち



3歳クラス 事例1 『どんな虫がいるんだろう?』

・・・心の動き

・・・主体的な活動によって育まれる力・経験の広がり

◆場面1◆ ☆虫かごをもって、戸外遊びに～☆ ◇2021年5月初め◇

◎普段から自然が好きで、草花遊びや虫探し等をして楽しんでいた。虫を見つけるとヨーグルトなどの容器に捕まえるが、観察や飼育などはしたりせず、すぐに死んでしまった。死んでしまったことに興味はなかった。

【保育者の読み取りや思い・環境構成】

・捕まえることだけで満足している気持ち大きい。より興味・関心を持ってほしいと思い、年中児がオタマジャクシを飼育していた為、見に行くことにした。

◎オタマジャクシを見せてもらったことで、お兄さん・お姉さんへの憧れの気持ちも芽生えた。他学年が虫カゴを持って、戸外に行っていることに気付き、自分達も早速、虫カゴを持って虫探しをした。

A・B児：(r)「虫かご持って行きたい!!」(r)興味

*ある日、同じくカエルやバッタを捕まえてきた。

・子ども達からの“虫カゴが欲しい”と要望があり、虫カゴを用意する。

A児：(な)「ねえ、見て～自分で捕まえたんだよ～」(な)知って欲しい

・自分で捕まえたことを皆に知らせたい気持ちが出てきた。友達と一緒に過ごす楽しさを感じ始めた時期なので、友達と喜びを共有できるよう、“伝える時間”を設けてみる。



みんなに紹介している様子

見つけて・捕まえて満足!

保育者：「じゃあ、みんなに見せてくれる?」

恥ずかしがりながらも、みんなに教える。

C児：(r)(ん)「どこにいたんだろうね?」(r)知りたい・疑問

(ん)他児への関心

A児：(み)「自然園にいたよ!」(み)発言

B児：(な)「バッタは、ピンクバッタさんのお部屋の近くにいたよ～!」

A児：(な)(ん)「小さいバッタがいっぱいたんだよ!ほくも見たよ～」(な)伝えたい・共感

(ん)思いを発信する、伝える楽しさ

A児・子ども達：(i)(だ)「もっと捕まえたかった～!また行きたい!」(i)意欲

(だ)実現させたい・気持ちの膨らみ

その翌日、虫かごを見ると・・・

A・B児：(f)(i)(だ)「動いていない」「元気がないね」「どうしよう」「自然園に逃がそう」

(f)気付き・つばやき・戸惑い(i)意欲・考える(だ)興味関心の広がり

自然園で・・・

Y・S児：(f)「バイバイ!」「また遊ぼうね!!」とバッタに声を掛ける。

(f)3歳児なりの優しさ・思いやり

その時、同じ虫かごにいたカエルまで跳んで逃げてしまった。

B児：(f)(ん)「あ～、逃げちゃった」「お外が楽しいのかな?」「バッタさんと一緒に良いんだね!」

(f)残念・想像(ん)自分の経験を重ねて

B児：(i)「早く!また見つけに行こうよ～」(i)意欲

・虫が死んでしまったことに対しては、あまり深くは考えていなかったが、子ども達なりに優しく声を掛ける姿が見られた。しかし、目の前で別の出来事が起きると、死んでしまったバッタよりも、目の前の事象に気持ちが切り変わってしまった。一瞬一瞬の出来事で子どもの興味が変わったり、途切れたりする。

◆場面2◆☆観察の様子☆ ◇2021年5・6月◇

◎テーブルの上に虫カゴを置いておくと、自分達で椅子を持ってきて観察し始めた。

初めは、少しでも見えると満足し、餌をあげる時以外は、座って見る事が多かった。

しかし・・・次第にA児：(r) (み)「見えない!」「場所交換して〜」(r) 興味関心 (み) 感情表現

・立ったり、座ったり、移動したりする中で、見る角度によって新たな発見があり、見え方の違いの面白さを感じた。自分の思いや欲求を伝えようとする姿が増えてきた。

◎見たい気持ちが高まり、立ちあがって蓋を開けて上からのぞきこむと、更に良く見えることに気付く。

C児：(な)「すごい!よく見えるね!〇〇ちゃん見てみて〜」(な) 伝えたい・知ってほしい

A児：(な) (い)「蓋が開くから、上からパンとかきゅうり入れられるよ!」(い) 共有

◎登園後や戸外遊び後に保育室に入ると一番に虫カゴをのぞき、虫の様子を気に掛け、観察やお世話が生活の一部になってきた。

C児が床に置いてあった虫カゴを、しゃがみこんで見てみると、自分から見る角度を変えて、



カエルのお腹が見えた!

C児：(i)「寝て見てもいい?」(i) やってみたい

D児：(f) (ん)「わぁ〜面白い!」(f) 驚き

(ん) 一緒にやって楽しい

C児：(e)「上からバッターさんお水にジャンプしたよ〜」

D児：(e)「(カエル) わぁ〜、お腹が見えた〜」(e) 新たな気付き



カエル・バッター
クワガタ



クワガタさんの
えさをあげよう!

～考察～

・他学年の姿を見て刺激を受け、「もっと見つけたい!」「一緒に遊びたい!」「面白い!」と虫に興味が高まってきた。初めは、虫が苦手だった子や友達の輪に入れなかった子が友達の様子を見て、“何をやっているの?” “触ってみたい”と関心を示したり、「自分も〇〇したい」と自己欲求が出てきて、一人ひとりの心が動いている瞬間を感じた。また、様々な角度・視点によって、見え方が違うことに気づいた驚きや楽しさは、大きな感動があった。身の回りの環境と、身近な存在(友達・保育者・年中・年長児)が、子ども達の心を動かし、意欲・原動力に繋がっていくとを感じる。

事例2 『クワガタと遊びたいなあ』

◆場面1◆☆クワガタ持ってきたよ☆ ◇2021年7月上旬◇

☆以前、保育者が「虫を捕まえたお友達は、お家の人と話をして持ってきて良いよ!」と伝えたことを覚えていて、クワガタを持ってきた。

ある日・・・A児：(i) (だ)「お部屋に出してみる?」(i) やってみたい

B児：(i)「お散歩させたい!」 (だ) 実現させたい気持ち

実際に床に下ろして、歩かせようとするが、思うようにいかず、ひっくり返ってしまった。

子ども達：(i)「嫌だ!嫌だ!って言ってるんだよ」(i) 子ども達の想像・イメージ

(ん) (な)「怖いから触れない!」「誰か〜」(ん) 思いの発信 (な) 葛藤

A児が恐る恐る指で起こすと・・・子ども達：(ん)「歩けるかな?」「歩くの速いね〜」

「お散歩楽しい?」(ん) 関心

(i) 考える

*歩いているのを見て・・・A児：(i)「お散歩好きなんだね」「お部屋の端っこが好きなのもかもしれないよ?」

*ほこりがついているのを見て・・・子ども達：(i)「お掃除しているみたい!してくれてるのかな?」

B児：(i) (ん)「面白いね」「先生みたい」(i) イメージ (ん) 何だか面白い

子ども達：(f)「あと、虫カゴに入れよう」と散歩させられたことに満足していた。

(f) やってみたいことの嬉しさ・喜び

・子ども達から出てきたアイデアを大切に、楽しい活動が広がると良いなと考えた。

◆場面2◆☆後日「もっとクワガタムシさんと遊びたい!」☆ ◇2021年7月中旬◇

保育室を散歩させてあげた数日後、登園してきた子ども達が様子を見ると、動いてないことに気づく。

A児: (ん)「え～動いてないよ?」「どこに逃がす?」「自然園が良い!」「バッタさんと同じ所にしよう!」

※バッタやカエルのは、最後に「バイバイ!」と挨拶をして終わったが・・・ (ん) 思いを発信する

今回は死んでしまったが、離れがたい気持ちがある。

B児: (f) (ん)「一緒に外で遊びたかったよ～」(f) 寂しさ (ん) もっと一緒に遊びたい

保育者:「どうする?」「最後にみんなで遊ぶ?」

B児: (f) (な)「やったー!」「抱っこしてあげればいいんじゃない?」「そうだね!!」

(f) 嬉しさ・喜び (な) 認めてもらえた喜び

保育者:「どうやるのかな?どこが好きなんだろうね?」

A児: (i)「自然園が良いんじゃない」「木が好きなんだよ!」(i) イメージ・予想

・普段、子ども達が楽しんで遊んでいる自然園なので、自分の好きな場所やクワガタが好きそうな場所を探し、楽しんでいた。自分が楽しいことは、“クワガタも楽しい”と、自分と重ねて考える行動が見られる。“死んでしまったクワガタと遊ぶ”とは、どのようにするのか、見守ることにした。

・死んでしまったことは分かっているが、離れがたい気持ちがある。子どもの気持ちを受け止めて、触れる時間を設けた。

B児:「一緒に(見晴台)行こう!」→ 本当に地面を歩くように動かしながら、階段を上っていた。

見晴台に登り、木に乗せてあげようとするが、落ちてしまった。

B児: (i)「あ～!!」「大丈夫かな?」「どこが良いかな?」(i) 考える

子ども達: (だ) (別な木の所)「どうかな?」「あ～ダメだ」(だ) 実現させたい気持ち

C児: (I) (木の切り株)「ここは～?」(i) やってみたい・試してみたい

子ども達: (f)「どうかな?」「わぁ～落ちない!!」「やったー!」

「ここが好きなんだね!」「一緒に遊べたね!」「楽しかった」

「また遊びたい!」(f) 自己満足

・落ちずに木に乗せてあげられたことに満足!!

A児: (f)「まっすぐ平らだったからかな?」「一緒に遊べたね!」「楽しかった」

「面白かったね!」「一緒に遊べて楽しかったね!」「クワガタさんも喜んでくれたかな?」(f) 自己満足



「階段だよ」

切り株の上では安定した様子

～考察～

・クワガタの事例では、生き物の死ということよりも、自分が楽しいと思う気持ちが大きかった。3歳児にとって、自分の気持ちと相手の気持ちが＝(イコール)と考えがちで、自分が楽しいと思うことは相手も楽しいと感じていた。生き物に対しても同じように捉えており、自分達が楽しむことが優先で、生き物の死を深刻に捉え、寂しい、悲しい等と感情を揺れ動かすことは少ない。生き物の気持ちを考えたり、感じられるようになるには、自分が保育者や友達と関わる中で、正の感情だけでなく、負の感情も味わい、存分に自己表出、自己表現することを積み重ねていくことが重要である。そして、受け止めてもらう安心感、喜び、満足感を味わうことで友達の思いに耳を傾け、受け入れられるようになる。様々な経験を重ね、感情を広げることで少しずつ相手の思いに気付くことが出来るようになっていくのではないかと考える。

・生き物の「死」に対してどのように伝えていくか、とても難しいところだが、保育者の考えや思いを押し付けるのではなく、子どもの感じる過程を大切に、心の動きに寄り添いながら伝えていきたい。

・子どもの主体性を大切にできたことで、子ども達からの“一緒に遊びたい”“もっとクワガタに触れていたい”など素直な思いが引き出せたように思う。今後も生活や遊びの中で子ども達の小さな発見や気づきに目を向けながら「なんで?」「どうして?」と疑問に思ったことを一緒に考え、“やってみたい”という気持ちを育てられるように毎日がドキドキ・ワクワクする保育を行っていきたい。

4歳クラス 事例1 『“ドキドキ” “ワクワク” カエルとの出会い…』

◇ 2021年 5月下旬◇

毎日生き物を見ることを楽しみに登園している子が多い。家庭で捕まえたダンゴムシやカマキリ、魚やカニなどを嬉しそうに持ってくる。その姿をみて、周囲の友達も、生き物に興味を持ち始め、毎日虫かごの中を観察したり、図鑑を見たりし、興味が広がっていた。また、戸外遊びに出かける時は、虫かごや図鑑を持ち、捕まえた生き物を入れたり、じっくりと観察して、「これだ!」「似てるね!」などと、友達や保育者と発見を伝え合うようになった。

◆場面①◆

E児: (み)「ねえ! カエルがいたよ! こっちにはバッタ!」 (み) 発言

保育者:「本当だ! すごい! 捕まえられたんだね!」

F児・G児 (r)その様子をじっと見ている (r)興味・関心

保育者:「触ってみたら?」

F児・G児「ううん。いい」 首を横に振り、嫌がる

E児: (な)「何もしないよ! 手出してみて!」 (な)共感・知って欲しい

F児は勇気を出して手を出す

E児:「ほらね! 何もしないでしょ!」

F児はニコニコと嬉しそうな表情をしている (f)出会い・嬉しさ・ワクワク

F児: (f)「可愛い! (カエルが跳んで) わぁ! びっくりした! もう1回!」

H児: (i)「ねえ! その虫かごに、カエル捕まえて、お部屋につれていこう!」

子ども達: (な)「いいね!!」 (な)共感 ↳(i)意欲・やってみたい

【保育者の読み取りや
思い】

F児とG児は、カエルに“触れてみたい”という気持ちはあるがなかなか一歩が踏み出せずにいた。友達が手を差し伸べたことで、“触れた”という喜びを感じ、興味・関心を刺激された。身近に育てる中で、更に関心を広げてほしい。

◆場面②◆

カエルを捕まえて保育室に連れて帰ったことで満足し、興味は継続しなかった。

～数日後～

H児: (r)「あ。この前のカエルは?」 (r)関心

以前捕まえたカエルを思い出し、虫かごを持ってくるが、カエルは動かない。

H児・I児: (f)「死んでるー!」 (f)驚き・落胆

I児は虫かごをトントンと動かしてみる。 H児は、“死んでいる”と思いそのまま放置する。

I児: (f)「あ! 動いた! 生きてるよー!」 (f)発見・喜び

H児: (f)「うそ! でも、もうすぐ死んじゃうよ。弱ってるもん」 (み)

↳(f)悲しみ・落胆 (み)感情表現

E児・J児: (i)「え! かわいそう! どうしよう!!!」 (み) (i)考える (み)つぶやき

H児: (i)「水掛けてあげよう!」 (n)だって、カエルは水が好きなんだもん!」

↳(i)試したい

↳(n)経験からの考え

蛇口の水をそのまま掛けようとする

K児: (i)「え! かわいそうだよ! カエルさん痛いよ!」 (f)

↳(i)思いやり

↳(f)想像

K児: (な)「でも死んじゃうよ!」 (な)葛藤

L児: (i)「これでやればいいんだよ!」 霧吹きを持ってくる (i)知識の共有

H児: (e)「おお〜いいね!」 (だ) 霧吹きをかけるとすぐに元気になった

↳(e)新たな気付き・発見

↳(だ)交友関係

K児: (d)「ああ。良かった! カエルさん、やっぱり水が好きなんだ!」 (i) (d)納得・確信

(i)あとは、何が好きなのかな?」 (i)もっと知りたい・考える

(i)知識の共有・伝達



はじめて触ったよ!



- ・カエルが死んでしまったと思ったH児も、生きていると分かったと、元気にするためにどうすればよいか、自分の知っている知識や自分なりに考えた良い方法を伝え試みた。
- ・子ども達同士での伝え合いや試してみようとする発言が多く見られるようになった。友達の意見を受け入れ、「いいね！」と相手に共感したり、良さを認める言動が増え、友達関係が広がろうとしている。
- ・K児を筆頭に、カエルが元気になってとても喜んでいて、この経験がきっかけで、子ども達自身が“生き物に優しくしよう”、“より気にかけてお世話しよう”とする気持ちが芽生えた。

◆場面③◆ K児の疑問を機に、カエルの絵本を準備した。K児は、自分でその絵本を見ていた。

K児：(e)「虫が好きなんだね！あと、葉っぱとか！」 (e)知識の獲得

保育者：「そうみたいだね！」

H児：(ん)「ねえ、オタマジャクシって知ってる？カエルの赤ちゃん！」 (ん)他物への関心

E児：「知ってるよ！前ね、田んぼで見た事あるよ！」

H児：「ほんとに！(i)捕まえてみたいな～」(i)やってみいたい

保育者：「行ってみる？」

子ども達：(d)「行きたーい！」 (d)新たな挑戦

実体験や絵本での知識を増やし、「もっとやりたい」「知りたい」思いが強くなっている。子ども達の興味の持続と、欲求を叶えるきっかけになればと思い提案してみた。

～考察～

- ・カエルに抵抗があった子が、友達の姿や言葉を通して勇気を出してカエルに触れた事で、少しずつ親しみを持てるようになり、自らカエルを捕まえたり、虫かごに入れて嬉しそうに見つめたり、自分で捕まえた喜びを味わうことができた。戸外遊びの中での発見や気づきが、自分達で育ててみたいという気持ちに繋がった。
- ・友達同士で知識を伝え合い、互いの言葉を受け入れながら、やりとりをする姿が見られ、同じようにカエルに興味を示す友達との人間関係が出来てきている。友達の意見や思いも受け入れられる仲間意識が出来ているからこそその姿だと考える。生き物が好きで、色々なことを知っている友達の話を聞いたり、図鑑を見て調べたりする姿が多くなり、ワクワクと心を弾ませ、新しい発見や気づきを楽しみにすることが行動として表れてきた。

事例2 『オタマジャクシ捕まえられるかな？』

◇2021年6月上旬◇

図鑑を見て、オタマジャクシの捕まえ方を調べ、網・バケツ・小さいカップを持って田んぼに出かけた。

◆場面④◆

E児：(d)「オタマジャクシいるかな～」 (d)期待

田んぼをよく見てみるが、なかなか見つけれられない

H児：(f)「全然いないじゃん！」 (f)落胆

～数日後～

E児：「え！すごい！なんで！！」

H児：(r)「このオタマジャクシどこにいたの？」 (r)関心・知りたい

保育者：「田んぼにいたよ！そーっと静かに近づいてとったんだよ」

E児：(i)「私もやってみよう！今日も行きたい」 (i)試したい・意欲

子ども達と一緒に田んぼにオタマジャクシ探しに出かけたが、姿が見られず、残念がっていた。そこで、興味が途切れないよう、保育者が実際に捕まえ、子ども達に見せた。



～田んぼにて～

E児：「オタマジャクシいますか～？」

H児：(i)「足音立てないで静かに行くんだよ！先生が言ってたよ！」 (i)知識の共有

F児：(f)「あ！いたいた！いたよ！」 (f)発見・喜び

初めは、図鑑に載っていたカップで採ろうとしたが、田んぼの奥の方に逃げてしまう。その様子を見て、子ども達なりに考え、カップから網に切り替えて捕まえようとしていた。

H児：(i)「網の方が遠くまで届くんじゃない？」 (i)試したい

F児：(d)「そうだね！やってみよう！」 (d)実現させたい気持ちの膨らみ

(i)自分達で準備した物を使いながら、一生懸命捕まえた。その後も、たくさんオタマジャクシを捕まえた。

↳ (i) 共同

H児：(d)「みんなに見せよう！」 (な) (d)達成感・満足感 (な)伝えたい

保育者が捕まえたことで、「自分たちも捕まえたい」「きっと捕まえられる」という期待が大きくなり、子ども達の更なる意欲に繋がった。諦めずに挑戦し、自分達で予測し、準備したもので捕まえられたことで、より大きい喜びや達成感を感じている。

～考察～

・カエルと触れ合う中で、子ども達の興味が自然とオタマジャクシにも広がっていった。“見たい” “触れたい” “捕まえてみたい” と次々と意欲が生まれていることに気付いた。

・H児は、オタマジャクシが遠くに逃げたのを見て、網の方が取りやすいと考えた。自分の考えを友達に伝え、その考えに共感してもらい、H児も嬉しそうだった。子ども達同士で「あ！ここにいるよ！」と居場所を教え合いながら、意欲的に活動していた。気付きや発見・思いを伝え合い、それを受け入れ、試す中で子ども達の協同の気持ちが育っているのだと感じた。子ども達同士で考えをめぐらせ実際にやってみる中での気付きが多かった。

事例3 「オタマジャクシは何を食べるの？」

◇2021年6月中旬◇

捕まえたオタマジャクシを毎日観察していた。今まで興味のなかった子ども達も、水槽の近くにきて、中をのぞいたり、絵本を見たりしていた。

ある日、M児がオタマジャクシを見ながら、「オタマジャクシはパンを食べるんだよ！（近所に住む）石井さんが言ってた！私もあげてみたいな！」と言った。

◆場面⑤◆

「パンをあげてみたい」と言っていたA児は、自分でパンをちぎってあげていた。

M児：(d)「あ！本当にパン食べてるよ！」 (d)納得・確信

保育者：「本当だね！」

子ども達：(i)「私も（僕も）やってみたい！」 (i)意欲・試したい

M児：(i)「いっぱいは入れちゃダメなんだよ！オタマジャクシ、食べ過ぎると死んじゃうんだよ！石井さんが言ってたもん！」 (i)知識の共有・伝達

M児の言葉は、周囲の子には届いておらず、個々の“パンを入れたい”感情が優先し、次々にパンを入れてしまう。

M児：(d)「ああ！駄目だよ！死んじゃうよ！先生、(d)あとでこのパン少し取ろう！」

↳ (d)諦めずに思いを伝え粘り強さ

↳ (d)乗り越える手段の模索



実際にオタマジャクシが餌を食べている姿を見て、クラス全体がオタマジャクシの餌に興味を示し、“あげてみたい”という気持ちが見られた為、オタマジャクシの餌についてみんなで考えてみた。
クラスでオタマジャクシは何を食べるか話し合うと、次のような考えが出た。

知識

M児：「パン！」⇒近所に住んでいる石井さんが教えてくれた情報 ⇒ **食べた！**

J児：「おにぎり（ごはん）」⇒自分たちと同じ物を食べるとする ⇒ **食べた！**

予想

K児：「葉っぱ」⇒カエルが葉っぱが多い所にいるから ⇒ **食べなかった…。**

H児：「リンゴ」⇒自分が好きだから、オタマジャクシも好きだと思う **食べなかった…。**

～考察～

・クラスでの話し合いの際に、一人ひとりが自分の考えを言うと、周囲の子も「僕もそう思った！」と共感したり、「え！絶対食べないよ！リンゴは固いもん！」と自分の思いを伝える姿が見られた。友達の言葉に耳を傾け、一緒に考え、予想する中で、クラス全体が“オタマジャクシは何を食べるか”への興味を持つようになった。1対1の会話でのやりとりと、クラスで考えや思いを伝え合う機会を設けることの大切さを実感した。
・M児は、自分の気持ちが友達に届かず、もどかしさを感じていたが、自分なりに解決の仕方を保育者に提案していた。気持ちが届かなかったから、諦める・伝えるのをやめるのではなく、自分なりにどうすれば良いかを考え、伝えることができた姿を見て、M児の気持ちの面での成長を感じた。

事例4「オタマジャクシなの？カエルなの？」

◇2021年6月下旬◇

子ども達は、毎日、登園するとオタマジャクシを見に行っていた。餌をあげ、数日すると、オタマジャクシに変化が見られた

◆場面⑥◆

↑(な)伝えたい

(だ)交友関係

H児：(な)(だ)「ねえ！みんな、オタマジャクシに足が生えてるよ！！」(f)発見

I児：(f)「本当だ！すごい！これ、昨日は無かったのに！」(f)発見

J児：(す)「こっちのオタマジャクシはまだ生えてないよ！」(す)発見の共有

H児：(i)「まだ赤ちゃんなんじゃない？」(i)予想

～数日後～

L児：(e)「あ！手が生えて来てる！！」(e)新たな発見・気付き

N児：(す)「ほんとだ！みんな～オタマジャクシに手が生えてるよ！」(す)発見の共有

子ども達：「え！本当だ！」

L児：(i)「次は、尻尾が無くなって、色が変わって…」(i)予想

H児：(だ)「そうなんだ！よく知ってるね！」(だ)友達の良さに気付く

～さらに数日後～

N児：(e)「尻尾が短くなってよ！」(e)発見

H児：(e)「すごいよ！こっちは、もうカエル！」(r)でもなんか黒い…？」

↓(e)発見・喜び

↓(r)不思議

I児：「あ！ここには緑のカエルがいるよ！」



(r)伝え合い

～考察～

・オタマジャクシは変化が分かりやすいため、子ども達の興味が継続し、毎日観察をすることが出来た。図鑑や本でオタマジャクシの成長の過程は分かっていたが、実物を見て、日々観察を継続させることによって、図鑑から得た知識と実体験からの学びが一致し、さらに心が刺激され、感動が大きかった。
・オタマジャクシの成長を友達にも伝えようとする姿が見られ、一緒に発見を楽しみたい・発見を認めてもらいたいという気持ちが大きくなった。友達同士の伝え合いの中で、お互いの良さに気付き、仲間意識やクラスの一員である自覚が芽生えてきている瞬間だと感じた。

事例5 「雨の日探検に出発！」

◇2021年6月◇

梅雨の時期に入り、雨の日が続いた。雨の時期が好きなカエルと同じように、雨でも戸外の活動を楽しめるよう、保護者の方に雨合羽を準備していただき、戸外探検に行くことにした

H児：(f)「雨なのに外に行けるの！やった！」(f)嬉しさ I児：(f)「何かいるかもしれないよ！」

H児：「カエルいっぱいいるんじゃない？」

↳(f)期待・ワクワク

保育者：「あとは何かいるかな？」 子ども達：(i)「カタツムリ」「カエル？」「ダンゴムシ？」(i)予想

～各自自然園を探検する～

自然園を各々探検し、晴れた日と雨の日の自然園が違うことに気付いた子が多かった。

☆子ども達が見つけた物・気付き☆

(生き物) ↑(f)気付き

- ・カエル (いつもより沢山いた) ・尻尾が生えているカエル ・なめくじ
- ・カタツムリの殻 ・テントウムシとたまご ・カタツムリ ・ダンゴムシ

尻尾がついているカエル

(木や花)

- ・葉っぱにキラキラの水(雨粒)がついていた
- ・いつもはツルツルしている木の蜂蜜(樹液)がベタベタしていた
- ・テントの屋根に水が溜まっていた



木の蜜がベタベタしていたよ！



木の穴の中にも、カエルがいたよ！



カタツムリも雨だとすごく元気みたい！

なめくじも
見つけたよ！

～考察～

・雨の日に外に行けるという特別感といつもと違った雰囲気自然園にとっても喜んでいて、日頃、目にしている当たり前の物が、いつもと違って見え、形や触感が変化することを目の当たりにし、自然の面白さや新たな魅力を味わいながら活動する姿が見られた。見つけた物を友達に見せたり、互いに発見を認め合ったりしていた。

・子ども達なりに、晴れた日との違いを予想して探検していた。カエルは雨の日に沢山いたという気付きがあり、「カエルは雨が大好き」という予想が当たり、確信と自信を持って探検を楽しんだ。「お部屋にいるカエルにも雨を降らせてあげたいね」と生き物にとって良い環境を整えようとする思いやりが発言として表れ、友達間でも優しさや思いやりの心が浸透しつつある。自分たちが実体験で獲得した知識から積極的に飼育し、主体的に関わる姿に変化してきた。

事例6 「カエルに良い環境は？」

◇2021年7月上旬◇

図鑑を見たり、今まで得た知識をもとに、カエルを飼育していた。しかし、ある日突然カエルが数匹死んでしまった。

◆場面⑦◆

I児：(f)「ねえ、カエル死んじゃってるよ！」(f)驚き・悲しさ

H児：(n)「水が無かったからだよ！」(n)経験からの考え

K児：(e)「カエルって葉っぱも好きなんだよね！」K児が絵本を持ってくる。(e)確認

平仮名を覚えたI児が絵本にかいてあるカエルの飼育に必要な物をメモしていた。そのメモをもとに、友達や保育者と一緒に必要な物を集めた。

【続き】

H児：「早く入れようよ～」

I児：(i)「カエルは、隠れる場所があるみたいだよ！」(i)知識の共有・伝達

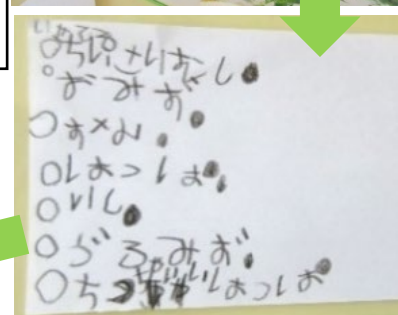
～その後も、絵本を見ながら準備した物を入れる～

H児：(d)「カエルさん、喜んでるかな？」(d)期待

I児：(i)「死なないで、元気でいてね！」(i)生き物への思いやり



☆子ども達がお家☆



I児が描いたメモをもとに、自分たちで必要な物を集めて来た。

◆場面⑧◆

J児：(f)「ここになんかついてるよ！」(f)気付き

I児：(i)「黒いからうんちじゃない？」(i)予想

～蓋を開けて嗅いでみる～ (f)気付き (e)調べる・探求心

J児：(f)(e)「うんちの匂いしないよ！」(f)気付き (e)調べる・探求心

O児：(n)「でも、ずっと置いておいたらカエルさん嫌だよね…」(i) (i)生き物への思いやり

J児：(n)「お掃除してあげよう！」(s) (n)予想・伝え合い・経験からの考え

(s)提案

O児：(s)「そうしよう！」(s)考えの一致

J児：(r)「どうやってやる？」(s) (r)疑問 (s)相談

O児：「絵本には載ってないね…」

しばらく考えたが、イメージが湧かない様子…

保育者：「こんなのがあるよ！」保育室の水道掃除用のスポンジを出してみる。

J児：(e)「あ！お皿洗いみたいに、これでゴシゴシすればいいんだ！」(e)新たな気付き

その後、(e)自分たちなりに考え、水槽の中身を全部出して、スポンジで洗った。(e)協同

きれいに掃除したことで、満足していた。



◆場面⑨◆

O児：(f)(n)「なんかカエルやせっぽだね…」(f)気付き (n)見比べ

H児：(n)「ほんとうだね。」(d)ご飯あげないとダメじゃない？」(i)

↳(n)共感

↳(d)新たな挑戦

↳(i)考えの伝え合い

L児：(i)「カエルは昆虫を食べるんだよ？」図鑑を持ってきて、みんなに見せる。

↳(i)考えの伝え合い・知識の共有

H児：(d)「じゃあ、お外で捕まえてこよう！」(d)更なる意欲

～戸外へ出かけた時に探す～

E児：「いた！バッタ！」 J児：(f)「やった！捕まえたよ！」(f)喜び

O児：「こんなに大きいのもいた！」

～保育室に戻り、バッタとカエルを同じ水槽に入れることにした～



・生きているバッタをあげることに少し抵抗があった0児だった。しかし、大好きなカエルが死んでしまうかもしれないと考え、一生懸命捕まえた。カエルに“食べてほしい”という気持ちとバッタが“かわいそう”という気持ちが葛藤している瞬間だった。

【続き】

I児：「食べるかな？」

L児：(i)「食べて欲しいな～」 (i)願望

O児：(な)「でも、バッタかわいそうだね…」

H児：(な)「でも、食べないとカエルが死んじゃうよね…」

I児：(i)「あのカエル、じーっと見てるよ！狙ってるのかも！」

↓(i)予想・イメージ

カエルとバッタを入れた水槽を集中して観察していたが、その日は食べなかった。

I児：(r)「せっかく捕ってきたのに、どうして食べなかったんだろう？」 (r)疑問

その後、バッタの数を記録しながら、数日観察したが食べなかった。

子ども達から、「かわいそう」「バッタは好きじゃないのかな？」などと、カエルを気遣う声が聞かれた。今後、どうするかを聞くと、「お外に行ったら、自分で好きな餌食べられるかな？」「逃がしてあげる？」などと聞かれた為、クラスでの話し合いのもと、外に逃がしてあげることにした。

(な)思いの葛藤

～考察～

・子ども達がカエルの死（場面⑦）について“どうして？”と不思議に思ったり、“淋しい”“悲しい”という気持ちを持ったことで、カエルの飼育環境を見直すきっかけになった。死んでしまっても、興味が途切れず、次はどうしようと子ども達なりに解決しようとする姿が見られた。本を見て、カエルの住みやすい環境を見つけ、それを真似て自分達で納得できるように解決策を模索し、実践しようとする協同性や生命尊重の気持ちが育っている。

・子ども達はカエルのうんちを見つけ、大きさや形を観察したり、匂いをかいだりしていた。匂いはしないが、自分の生活する場所にうんちがそのままになっていることはカエルも“嫌じゃないかな？”と自分に置きかえて考えていた。「お掃除しよう！」というJ児の提案に、周囲にいた子が賛成し、自然と掃除をする流れになった。生き物の水槽の掃除は初めてで、どのようにやればよいかイメージが持てないようだった。保育者がスポンジを提案すると、イメージを持ち、子ども達なりに考えて掃除をしていた。保育者が初めからやり方を説明するのではなく、子ども達同士で話し合い、考えて解決しようとする姿を見守りながら、タイミングをみて解決へのヒントを出す大切さを実感した。

・カエルの餌は生きている虫だというL児の声に耳を傾け、その考えを受け入れる姿が見られた。L児も自分の気持ちを受け入れてもらえた喜び・満足感を感じている。子ども達一人ひとりにとって、“自分の好きな物を共有してくれる”“認めてくれる存在”はとても大切な存在で、安心して自己表現できる環境が自己肯定感を育てることがわかった。子ども達が自分で答え（カエルはバッタを食べること）にたどり着いたが、上手いかなかったことで、子ども達の中で、新たな疑問が生まれ、探求心が刺激された。

事例7 「カエルは何色になるの？」

◇2021年7月中旬◇

塗り絵やお絵かきで遊ぶ中で、“色々な色を使うときれいに見える”“カラフルに染めたいな～”と色への関心が広がってきていた。そんな時、草むらには、緑色のカエル、プールでは白色のカエルを見つけた。絵本をみて、カエルは色が変わることを知った子ども達は、「キラキラのカエルになるかな？」「ピンクのカエルになったらいいなあ」とカエルの色に興味を示すようになった。この子ども達のつぶやきから“カエル変身大作戦！”を行なうことにした。クラスで、どのように行なうかを話し合い、自分達で考えた道具を使って、準備をした。H児の「カエルは周りの色と同じ色に変わるんだよ！」という発言をもとに考えることになった。“色のついた紙の上にカエルを置いてみる”という意見が出ると、「跳んでいなくなってしまうかもしれないよ」という声が聞かれた。しばらく考えると、J児から「色を付けた部屋を作ってみるのはどう？」というアイデアが出た。そのアイデアにみんな納得し、色をつけた部屋を作ることが決まった。

～考察～

・子ども達が自ら興味を示し、実践することになったので、子ども達も意欲的に部屋作りを行っていた。何を準備するか、どのように行なうかなどを全体で話し合う機会を設けたことで、それぞれの考えやイメージを共有し、1人ひとりが考えや気持ちを発信する経験をする事ができた。今まで恥ずかしがり、うまく気持ちを言えなかった子も、保育者だけでなく、友達に「いいね!」「なるほど!」と受け入れてもらえることで、喜びを感じ、更なる意欲が芽生えた瞬間だった。

・子ども達が予想したカラフルなカエルにはならなかったが、表を完成させられた達成感、実際に変化が分かった喜びを味わえた。カエルを写真で残し、表にまとめたことで、どの子が見ても変化が分かった。また、その表を見ながら、友達同士で気付いたことを伝え合ったり、教え合う姿が見られた。自分と同じことに興味を示す“仲間”を意識し、仲良しの友達とはまた少し絆が強まったことが感じられる。

・黒いカエルとの出会いが、色のお部屋に入れることで願った通りの色のカエルに変わるかもしれないという期待感が膨らんだ。実際に色が変わる事を目の当たりにしたことで、子ども達の“カエルは色が変わる”という絵本からの知識を確信に変えた。実際に予想した結果には全てならなかったが、子ども達が主体的に活動を進めたことで、結果が分かるまでのワクワク・ドキドキする気持ちや、達成感や満足感を感じることができた。

事例8 「カエル先生に聞いてみよう！」

◇2021年8月上旬◇

今までカエルを飼育したり、触れ合って遊ぶ中で、「どうしてだろう?」「どうすれば良いんだろう?」と子ども達が不思議に思う場面が多く見られた。子ども達は、疑問を保育者に聞いたり、絵本や図鑑を見ることで解決してきた。カエルへの興味がどんどん広がっていた時期に、以前から保育室に掲示していた、カワセミ水族館の新聞記事を見ながら、「この人はいろいろ知ってるかな?」という声が聞かれ、いなわしろカワセミ水族館の方と連絡を取った。コロナ禍の為、実際に水族館に行くことは出来なかった為、水族館の方のご協力を頂き、カエルの飼育を担当している方にオンラインでお話を頂いた。

※水族館の方を、子ども達が親しみやすいように、“カエル先生”と呼ばせて頂いた。

☆今までの経験の中での疑問を子ども達がカエル先生に質問する機会を設けた。



いなわしろカワセミ水族館の方
(カエル先生)

(i) ☆子どもたちがカエル先生に聞いてみたいこと☆

↳ (i) もっと知りたい・調査

Q.みんなで育てたカエルが死んでしまいました。どうしてですか?

Q.カエルにバッタをあげたけど食べませんでした。どうしてですか?

Q.カエルのうんちはどうやってとるんですか?

Q.カエルの好きな食べ物は何ですか?

Q.水族館にはどんなカエルがいますか?

Q.どうしてカエルの色は変わるんですか?

カエル先生も、子ども達に分かりやすいように、説明して下さい、子ども達の理解につながった。

「またカエル先生とお話してみたい!」「また、分からないことを聞いてみよう?」「僕は水族館に行ってみたい!」等という声が聞かれた。





～家庭での子ども達の発言や様子～

- ◎「どんなお話をしたの？」と聞くと、「“カエルは何を食べるんですか？”って聞いたんだよ！」と教えてくれました。その後は、「コオロギを食べるんだって！」や「大きいカエルもいるんだよ！」と自分からいろいろ話をしてくれました。
- ◎カエル先生に質問できることをとても楽しみにしていました。「カエル先生がこうってだよ」「コオロギをあげると良いんだって！」「タオルを敷いて洗うんだって」等、教わったことを説明していました。そして、「今度やってみるね！」と、やる気を出していました。
- ◎「いつかカエル先生がいる水族館に行ってみたいな～」と言っていました。

～オンラインの翌日～

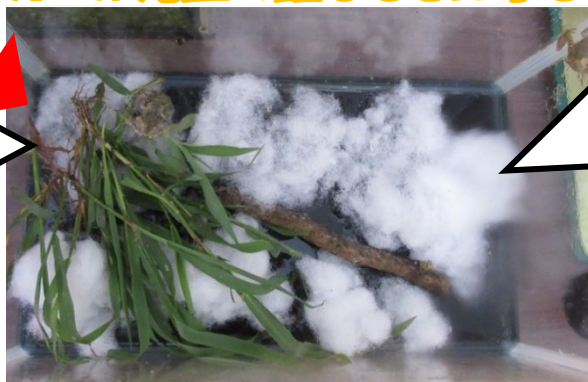
「我がカエルの水槽を見て、「昨日、カエル先生がフワフワの白いやつ（綿）を水槽に入れるって言ってたよね！」と振り返る。実際にやってみることにになり、保育室にあった綿を水槽に入れ、園庭に生えていた草を根から取り、子ども達なりに学んだことを実践する姿があった。



カエルの飼育を始めた時のお家
・石 ・水 ・土 ・葉っぱ

カエル先生の話をもとに子ども達なりに作ったお家

・カエルは恥ずかしがりや。葉っぱを入れる時は、根っこごと取って、入れてあげると良い。もしそこに、アブラムシなどが付いていると、餌にもなる。



Q. カエルのうちはどうやってとるんですか？

A. 水族館では、水槽に綿を入れて、掃除をしやすいようにしている。綿などをに入れて、掃除をしやすいように環境を整えてあげるといいかもしれない。

～考察～

- ・5月は、捕まえて虫かごに入れて満足していた子ども達が、今では毎日登園するとすぐにカエルの様子を観察し「今日も元気！」と喜ぶ姿が見られるようになった。オタマジャクシからカエルへの成長をみたり、カエルを育てるための適切な環境を考えたり、触れ合うことで興味・関心が広がり、満足するまで考えたり、“次はこうしてみよう！”という新たな挑戦をしたりする姿が育った。
- ・保育室でカエルの飼育が始まると、自然と興味・関心が広がり、「なぜ？どうして？」「もっと知りたい！」と探求心が高まった。地域の専門の方に協力を頂けたことで、図鑑や絵本で調べたり、保育者に聞く他にも、知識を増やす手段が増え、学び多き貴重な体験ができた。今後も、新たな疑問が生じたら、様々な手段で解決する方法を一緒に考えていきたい。
- ・コロナ禍で実際に水族館へ行くことは難しい為、オンラインでのやりとりをした。子ども達はいつも触れ合うことがない飼育員さんとのやりとりの中で、刺激を受け、夢中で話を聞いていた。
- ・カエル先生からの話を聞き、更なる意欲をかきたてられ、教えてもらったことをすぐに実践した。意欲が実践に繋がり、学んだことを子ども達なりにやってみようとする力が育っている。子どもの主体性を大切にしながら、適切に援助し、更に興味を持てるように保育を進めていく。
- ・子ども達は、カエルの飼育を通して、みんなの前で自分の意見を伝える体験ができ、自分の気持ちを受け入れてもらえる喜びを感じることができた。自分の思いを自分の言葉でいきいきと話をする姿を見て、自己肯定感の高まりを近くで見ることができた。自然との関わり、人とのつながり、触れ合いの中で、豊かな感性を育んでいきたい。

5歳クラス 事例1 『不思議なペットボトル!』

昨年までの経験から、ダンゴムシやバッタがたくさんいる場所、飼育する為に必要な食べ物や道具等を考えながら虫捕りや飼育を楽しんでいた。家庭で飼育しているカブトムシやクワガタを持って登園し、友達と一緒に観察しながら、知っている事を伝え合う姿があり、生き物への関心がより高まってきている。

ある日…保護者の方のご厚意でカブトムシの幼虫がこども園にやってきた。そして、登園した子ども達は謎のペットボトルを目にする。

◆場面1◆

◇2021年6月上旬◇

P児: (f)(r)「えっ!これ何!?段ボール?中に何か入ってるよ!」(f)発見・驚き・気付き (r)興味

◎P児の一言を聞きつけて、周りにいた友達がP児の近くに集まってきた。そこには、段ボールの中にたくさんのペットボトルが並んでいた。

子ども達: (r)「ペットボトル?何でこんなにたくさん?」(r)疑問

◎不思議に思いながらも、(ん)自然とペットボトルに手が伸びた。(ん)物への関心

(f)(r)土だ!何で
ペットボトルに土が
入ってるの?

(f)発見
(r)不思議・疑問



(f)(i)ここ見て、
土に穴が空いてるよ。
(f)気付き (i)探求心

(i)本当だ!なんか白い物
がいるんだけど!

(i)もっと知りたい

Q児: (i)「この白いのってカブトムシの幼虫だよ!僕、お家で育てているから分かる!」(i)知識の伝達

子ども達: (だ)「あっ!こっちのペットボトルにもいた!」

「みんな同じ形してるね。端っこが好きなのかなあ。」

(だ)交友関係・興味関心の広がり

「でも、こっちは見えないよ。何でかなあ?」

Q児: (n)「カブトムシは土の中が好きだから、土の中で眠って大きくなるんだよ。」(n)経験からの考え

R児: (i)(み)「メスとオスどっちかなあ。」(i)もっと知りたい・考える (み)つぶやき

P児: (み)「大きくなると分からないよね。」(み)つぶやき

Q児: (i)「水をあげないと死んじゃうから、水あげよう!」(i)知識の伝達・生き物への思いやり

S児: (す)「どの位あげればいいの?」(す)相談

子ども達: (す)「土の下まで届くようにたくさんあげよう。」(す)共有・提案

(す)友達と相談をし、霧吹きを使って水をあげていた。(す)共有・提案・協働



～場面1の保育者の読み取りや思い～

新しい物への興味、関心はとても高いので、棚の上の段ボールにすぐ気が付いた。中を見てみると、たくさんのペットボトルがあった。『ペットボトル=飲み物』のイメージが強く、何故土が入っているのか、何故キャップはされていないのかという疑問から中を見てみたい気持ちが生まれた。種もみ観察の経験から横や上からだけではなく、下からも見てみようとする様々な視点、角度から観察する姿があり、普段の保育の中で学んだ事や経験した事が行動となって表れていた。友達同士で疑問を投げかけ、知っている知識を伝え合う様子から探求心が芽生えたと同時に、疑問や知りたい事が増え、更に興味関心が広がっていると感じた。

事例2 『カブトムシと一緒に』

◆場面2◆

◇2021年7月中旬◇

(f) (ペットボトルの中の)
土の上にカブトムシがいる!!
(f)発見・嬉しさ・喜び



1ヵ月後...

(n) 本当だ! さなぎが成虫
にかえったんだ!
(n) 経験からの考え

～保育者の読み取りや思い・環境構成①～

毎日、友達と協力しながら水やりをしたり、観察を行なった結果カブトムシが成虫になり、『自分達で大切に育てたカブトムシ』という事で大きな喜びを感じた。同時にカブトムシへの思いやりや愛着が生まれた。

(s) 喜びと自信

(i) 友達・生き物への思いやり

T児: (r) 「成虫って何?」 (r) 知りたい・疑問

U児: (i) 「大人のカブトムシって事だよ。」 (i) 知識の伝達・共有

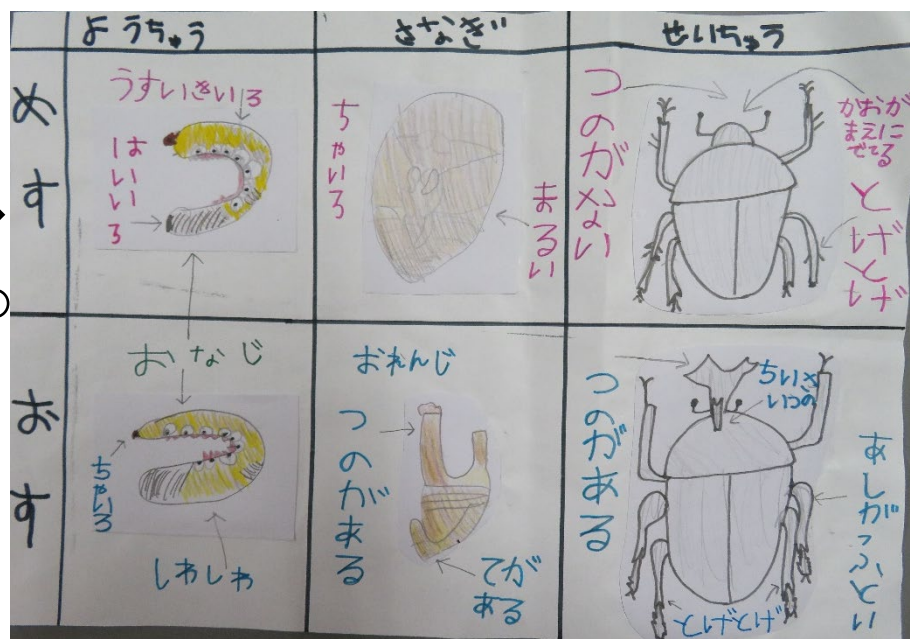
V児: (n) 「カブトムシの赤ちゃんと大人は形が違うんだね!」 (n) 自分の経験を重ねて考える

W児: (n) 「オスとメスも違うんだよね。」 (n) 伝え合い・見比べ

(i) クラスの一員
としての意識の高まり

みんなで
見て、気づき、考えた
～オスとメスの違い～

(d) 主体的な活動による心の育ち
(e) 調べる・探求



◎ 掴み方を絵本で知ったり、友達と話し合いをした内容を基に、(i) 実践してみた。 (i) 試したい・欲求

X児: (d) 「やったー。掴めた!」 (d) 達成感・納得・更なる意欲

Y児: (f) 「うわあ! カブトムシが服にくっついた! 誰か取って!」 (f) 驚き・戸惑い

S児: (n) 「いいよ。・・・あれ!? 引っ張っても取れないよ!」 (n) 葛藤

Y児: (f) 「えっ! 何で取れないの? 早く取ってよ!」 (f) 戸惑い

◎ (d) カブトムシを掴んで、更に力強く引っ張ってみると、カブトムシを服から取る事が出来た。

X児: (i) 「何で取れなかったんだろうね?」 (i) もっと知りたい・調査

(d) 乗り越える手段の模索

S児: (n) 「足がトゲトゲしているからだよ。前に指を掴まれた時、凄く痛かった。」 (n) 経験からの考え

(i) 「足をよく見てみて。トゲトゲしているでしょ?」 (i) 伝達

X児: (e) 「あっ! 本当だ。僕、知らなかったよ。」 (e) 知識の獲得



～場面2の保育者の読み取りや思い・環境構成②～

子ども同士での関わりの中で、気づきや疑問を言葉にしている友達に対して、自分の知識を用いて会話をしている。互いの考えを共有し、共感しながら興味関心や探求心を広げていけると良い。五感を使って気づきや疑問が得られるように、常に目が行きやすい場所に飼育ケースを置いたり、観察の際に自由に使えるよう虫眼鏡や図鑑を用意し、カブトムシを身近に感じながら関わられるような環境を整えた。友達と知識を共有しながら試す中で、実際に触れて痛みを感じたり、じっくり目で見てトゲに気付く等、新たな気づきを得て喜びや驚きを味わい、意欲や探求心が広がっていった。

事例3 『カブトムシってうんちするの?』

◆場面3◆

◇2021年8月上旬◇

Z児：(f)「みんな見て！カブトムシがおしっこしたよ！」(f)気づき

子ども達：「どれどれ？」

Z児：(な)「ほら！この茶色い水。」(な)知ってほしい・伝えたい

子ども達：(r)(i)「これ本当におしっこ？」(r)疑問 (i)考え

Z児：(な)「だって、今お尻から出たもん。」(な)知ってほしい

Y児：(i)(e)「じゃあ、おしっこだ！黄色じゃなかったんだ。」(i)予想 (e)新たな気づき・発見

V児：(e)(n)「カブトムシってうんちはしないのかな？」(e)調べる・探求 (n)新たな疑問

子ども達：「見たことないよね。」

(n)「してても分かんないんじゃない？うんち、茶色っぽいから土に隠れちゃう。」(n)予想

保育者：「うんちを見たことないんだよね？どうして茶色だと思うの？」

子ども達：(n)「だってみんなのうんちも茶色だし、ダンゴムシのうんちも黒っぽい茶色だったもん！」

(n)経験からの伝え合い・経験や知識を活かした考え



カブトムシのおしっこ



～トイレットペーパーでカブトムシのお家作り～(d)新たな挑戦 (き)認め合える仲間関係・自己発揮出来る場



(す)(e)うんちの色が分かるように、みんなでお家を作ってみようよ。

(す)共有・提案・協働

(e)発想



(e)土の代わりに、白いビニールか紙を敷いたら、うんちの色が分かるかも。

(e)協同・試行



(い)(e)潜れるように、柔らかいトイレットペーパーにしよう！

(い)生き物への思いやり

(e)アイデア



(す)それ良い考えだね！

(す)考えの一致

喜びと自信

(d)やったー。完成した!!

(d)満足感・達成感・期待

◎お家を作った翌日、カブトムシを観察してみると・・・

Z児：(n)「おしっこしかしないね。」

U児：(n)「ゼリーしか食べてないからじゃない？ゼリーは水分だから。」

(n)予想・経験からの考え

Z児：(d)「じゃあ違う物あげてみよう！きゅうりとか？」(d)探求心・新たな意欲

U児：(n)(い)「僕の家のカブトムシは、きゅうり食べたら弱って死んじゃったよ。」

あと、オレンジをあげたら死んじゃった。」(n)経験からの考え (い)知識の共有・伝達

◆場面3◆続き

Ｚ児：(n)「そうなの！？カブトムシには毒だったのかな。」(n)新たな疑問

Ｕ児：(す)「図鑑に書いてあったバナナなら大丈夫じゃない？」(す)提案・相談

Ｚ児：(i)「よし！バナナをあげてみよう！」(i)調査・探求

◎翌日、バナナをあげてカブトムシが食べている様子を観察し、(e)トイレットペーパーに茶色っぽい黄色い何かがついているのを見つけた。



(n)何か色が違う！！これがうんちかな？黒っぽい茶色じゃないね。」

(n)発見・見比べ



(e)新たな気付き・発見

(き)これもおしっこじゃない？塊じゃないし。カブトムシはおしっこしないのかも。

(き)自己表現出来る居場所

(d)いや、これがきつとうんちだよ！(d)納得・確信

～保育者の読み取りや思い～

昨年からＺ児とＵ児は、色んな生き物との関わりに意欲的だった。考えを伝え合ったり調べたり、最後まで諦めないで世話をする経験を繰り返し、二人で発見する喜びを感じていた。進級してからも、その思いや経験が継続され、生き物を大切にしながら、自分がやりたい事を自分なりに考えて試行する姿がある。Ｚ児は「これがうんちだ」と喜び、満足していたが、Ｕ児は「本当にうんちかな」と確証がない事で納得出来ずにいた。引き続き仲間と一緒に確信を求めて試行錯誤し、観察をするＵ児の心の動きを探っていきたい。

★降園時のＵ児と保護者のやり取り★

◇2021年8月上旬◇

(き)安心して自己表現出来る居場所

Ｕ児：(な)「お母さん。カブトムシにおしっこかけられちゃった。(靴を指さす)」(な)知ってほしい・伝えたい

保護者：「ええー！凄い。ラッキーだね！黄色じゃなかったんだね。」

Ｕ児：「うん。」

◎家庭での保護者とＫ児の会話の中で、カブトムシのおしっこは何色かと疑問が浮かび、Ｋ児が「黄色」だと予想していた事を保護者は知っていた。



～保育者の読み取りや思い・環境構成～

Ｕ児の声のトーンや表情から「うん。」という一言の中には、新たな発見をした喜びやワクワク感が溢れているように感じた。また、保護者が自分の思いに共感し一緒に喜んでくれた事で受け入れてもらえた嬉しさや満足感が読み取れた。

考察

昨年度、ダンゴムシの世話をする中で、食べた物によってどんなうんちをするのか等、様々な事に興味を持って関わった経験や、得た知識を活かしながら生き物と関わる姿があり、遊びや学びの継続性が見られた。自然が大好きな子どもを中心に生き物との関わりが深まり、小さな発見がきっかけとなって周囲の友達も興味や関心を持ち、学年全体での活動に広がった。昨年までは図鑑で調べた事を試す姿だったが、今年は調べた事を基に、自分達で考え目的を持って試す姿があり自己肯定感が高まった。主体的に関わる姿から、『個々の心の成長』と『仲間としての自覚』の育ちが分かる。

友達や自然との関わりの中で相手を思いやる気持ちが育った事で、カブトムシを大切にしたいという思いが次第に愛着へと変化し、仲間の一員として受け入れていると感じた。「カブトムシの世話をしたい」「カブトムシについてもっと知りたい」という興味・関心が膨らみ、子どもが主体となって調べたり試したりする事で、達成感や満足感、更なる意欲に繋がり『主体的な活動による心の育ち』が見られた。

5. 実践の考察・まとめ

☆学年ごとの科学する心の育ち☆

心の動きの変化・行動、姿の変容	3歳	4歳	5歳
f 感情の芽生え・広がり	9	19	7
r 興味・関心	3	7	5
i 意欲・探求	12	16	8
e 調べる・探求	2	11	8
n 試し探究心を深める (予想・伝え合い・経験からの 考え・見比べ)		7	12
d 主体的活動による心の育ち (納得・確信・達成感・満足感 新たな挑戦)		8	6

子どもの心の動きに伴う主体的な活動によって育まれる心の動き・経験の広がり	3歳	4歳	5歳
み 感情表現	2	3	2
ん 他児(物)への関心	9	1	2
な 共感・葛藤・大切な存在	7	7	4
だ 交友関係・興味関心の広がり	4	7	4
い クラスの一員としての意識の高まり (知識の共有・思いやり)	1	12	8
す 仲間としての意識		5	7
き 自己肯定感を育み認め合う 仲間関係・個々としての育ち			4

☆上の表は、各学年の実践報告で、1ページ目で示した本園の考える「科学する心の育ち」図表のどこの部分の心の動きやどんな力が育まれたかを数え、数字で表わした。

3歳クラス→たくさん見られた心の動き <<(f)・(i)>>

心の動きに伴い育まれる力・経験の広がり <<(ん)・(な)>>

- 自然との触れ合いは、子ども達の心を動かし、保育者や友達と繋がるきっかけとなった。生き物に触れ、心が刺激され、楽しさ・嬉しさ・驚きを、つぶやいたり発言したりすることが多くなり、その気持ちや言葉を保育者に受け止めてもらえた嬉しさが安心感となり、信頼関係の築きに繋がった。保育者と信頼関係を築くと、少しずつ友達の存在にも目を向けられるようになり、子ども同士の会話が増えた。同時に思い通りにならない経験もし、負の感情も芽生えていった。3歳児は、自然や身近な人との関わりの中で様々な感情を味わい、存分に自己表出・自己表現することが重要だと考える。保育者自身が子どもの素直な感情や自由な発想を受け止め、一緒に実現させることで、更に子ども達の感情が大きく動き『もっとやりたい』と新たな意欲へと広がっていく。子ども達の主体性を大切にしながら、身近な人や環境の中でワクワクドキドキと心を弾ませ、様々な感情を味わうことが、興味関心を広げ、主体的な活動や意欲の高まりへ繋がっていくと感じる。

4歳クラス→たくさん見られた心の動き <<(f)・(i)・(e)>>

心の動きに伴い育まれる力・経験の広がり <<(な)・(だ)・(い)>>

- 3歳クラス時代から様々な生き物に触れて遊び、見つけた生き物を図鑑や絵本で探したり、昆虫やカエルにも色々な種類がいることを知り、興味を広げてきた。4歳クラスでは、自分が得た知識を、自分の言葉で友達や保育者に伝え、受け入れてもらい、相手に伝わる喜びを感じる事が出来た。クラスでの話し合いの場面で、堂々と発言する姿が増えていった。また、自分とは違った思いや、考えに気付き、「いいね!」と素直に共感したり、知識の豊富な子に、「いっぱい知っていてすごいね!僕にも教えて!」と良さを認め、刺激し、育ち合う関係が出来始めている。子ども達が安心して自己表現できるよう保育者が子どもの声を聞き逃さず、気づきや自己肯定感を促していくように関わっていくことが大切になっていくと実感した。

5歳クラス→たくさん見られた心の動き <<(f)・(i)・(e)・(n)・(d)>>

心の動きに伴い育まれる力・経験の広がり <<(な)・(だ)・(い)・(す)・(き)>>

- 友達や自然との関わりの中で、興味関心の広がりや調べる意欲、探求心が深まった。幼虫から育てたカブトムシを大切にしたいという思いが次第に愛着へと変化し、仲間の一員として生き物の為に何かしてあげたいという思いが膨らみ、細かい部分まで知ろうと“生態”について探究する姿が見られた。主体的に関わる姿から、『個々の心の成長』と『仲間としての自覚』の育ちが分かった。子どもが主体となって調べたり試したりする事で、『発見・ときめき・ひらめき』の瞬間がたくさん生まれ、更なる疑問や意欲に繋がっている。3歳・4歳クラスでの経験や、友達・保育者との信頼関係の積み重ねが土台となり、互いの良さを認め合える環境が整っていることで、伸びやかに自己表現、自己発揮出来る。さらに、家庭の中でも、子どもの思いに寄り添い、一緒に考えたり喜んだりする関わりが加わる事で、豊かな感性を育む為の大きな力になっている。友達との繋がりのや、生き物との出会いを大切にしながら、子どもが自らの思いを試せる環境作りを引き続き大切にしていきたい。

- ・ 実践事例は、一部だが、年齢ごとに考察をしていくことで、どのように心が動き、行動や姿が成長していくのか改めて実感することができた。感じた事や発見した事を友達に伝える事で、興味関心が広がったり、子ども達同士の会話ややりとりが生まれ、個々が自分の思いを伝えられるようになってきた。更に学年が上がると、自分の考えを伝え、友達に受け入れられた喜びを感じ、自信を持って自己発揮する育ちが見られた。また、友達の考えや思いを受け入れたり、共感したりする姿から、友達の良さに気づき、仲間として認め合う関係性が出来ていることがわかった。自分の考えだけに留まらず、様々な視点からの考えを聞くことで、発見や疑問、探究心が無限に広がり、刺激を与えてくれる友達の存在が原動力になっている。

- ・ 園での子どもの様子や活動を SNS を活用して保護者に伝えた。写真や文だけでなく、動画で子どもたちが心を動かし活動する様子を見て頂いた事で、保護者が子どもの興味を深めたいという気持ちが大きくなり、実際にいなわしろカワセミ水族館に足を運んでくれた。水族館では、普段は見る事が出来ない珍しい種類のカエルや福島県内で生息している生き物を見たりし、更に身近に感じたり、興味関心が広がり、園での戸外遊びの際にも、様々な生き物に目を向けるようになった。

園で感じた子どもの素直な心の動きに、保護者の方が共感し、子どもと一緒に、探したり、試したり、家で見つけた生き物を持たせて下さったりしたことで、子どもの更なる興味関心が芽生えるきっかけになった。子ども達の興味に寄り添って、協力して下さる保護者のサポートも科学する心の成長には大切になってくると実感した。

6. 課題と今後の方向性・計画

《課題》

- ・ 昨年度、子ども達の心身の成長は、家庭と園の連携が重要であることを挙げた。今年度は、園での取り組みを動画で発信し、家庭での様子を知らせて頂いたことで、保護者と保育者が子どもの気持ちが盛り上がっている丁度いいタイミングで一緒に共通理解し、活動や育ちにより関心を持つことが出来た。保護者と保育者が情報交換することで一緒に子どもの成長を喜び、課題も踏まえながら成長を促すことが出来た。

今年度、地域の方（いなわしろカワセミ水族館）の協力を得て、オンラインで話を聞いたことは、刺激的でとても良い経験になった。“飼育員さん”という、大切な役割を担っている人の存在を知り、生き物を飼育するためには『お世話する』『環境を整える』ことの大切さ等、新たな気づきや発見に繋がった。これからもインターネットをうまく活用し、保育に取り入れながら、園からの発信の工夫や地域の方の協力連携へ繋げ、子ども達の興味関心や好奇心を広げる活動を続けていくことが課題である。

《今後の方向性・計画》

- ・ 今回は、生き物を通しての実践報告であったが、今後もいろいろな活動を経験し、様々な感情を味わいながら成長していくと思う。子ども達自身が、思いや願いを持って主体的に活動することが出来るように、子どもの“やってみたい”という意欲や“どうしてだろう”という疑問を保育者と一緒に考えながら、感動や達成感を味わえるような保育を進めていく。また、子どもが感じた喜びや感動は、誰かに伝え、受け入れ、共感してもらうことで、満足感や達成感、更なる意欲に繋がる。今後も、子ども達の主体性が輝く保育を目指し、『サンマ（3つの間＝仲間・時間・空間）』を大切に補償していく。そして、“自分の思いを発信する”“意見交換をする”“自由に発想し実現に向けて取り組む”ことができる環境構成をし、「科学する心」を育んでいきたい。

【参考文献】

- | | |
|------------------------------------|------------|
| ・ こどもとしぜん 7月号「むしのもちかためいじんになろう！」 | 出版社：ひかりのくに |
| ・ よいこのがくしゅう ぴっかり 4月号付録「しぜんすかん」 | 出版社：学研 |
| ・ ふしぎだな？ブック⑥ 「たんぼのあまがえる」 | 出版社：世界文化社 |
| ・ ワンダーランド・ワンダーしぜんランド 4月号付録「しぜんずかん」 | 出版社：世界文化社 |

【執筆者】

◎大堀未来（研究代表） ・ 大堀茄穂 ・ 小椋沙織 ・ 遠藤愛実